

第1章

全国をめぐる商品・お金
―大店・見世売り・仮設店舗・棒手振り―



描かれた

江戸の商人

販促ツールと商いの秘訣

江戸の商人を支えた物流

全国をめぐる商品・お金

江戸時代には、幕府による統治のもとで、様々な商品が全国的に行き交いました。各地で生産された商品は、大坂などの物流拠点に集められ、そこで値段がつけられた上で消費地へ送られました。

最大の消費地であった江戸では、様々な商品が販売され、賑わっていましたが、モノが取引されるということは、お金が動くということでもあります。

幕府が発行した金貨・銀貨・銭貨と両替屋の信用がこの全国規模の流れを金融の面から支えました。



江戸のメインストリートにはためく暖簾

大店 呉服屋のイメージ戦略

大店と称される商家は江戸のメインストリートに、間口が10メートルを超える店舗を構えていました。暖簾には大きく屋号や印を入れ、その繁栄を誇りました。

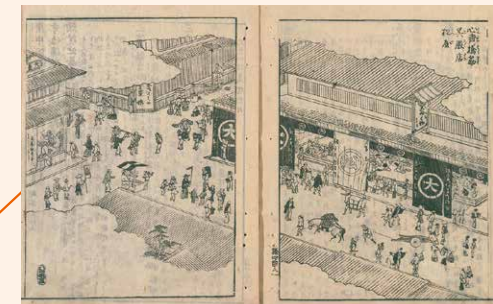


呉服屋の店先と通りの正月の賑わいが描かれている。華やかな着物の人々が多く描かれ、呉服の購買意欲を促す意図を感じさせる。

いとう松坂屋の前身にあたる呉服小間物屋「伊藤屋」は江戸時代初期に名古屋で創業。1768年に江戸上野の松坂屋を買収し、江戸進出を遂げた。

『攝津名所圖會』に描かれた大坂の大店①

江戸に支店をもつ呉服屋は大坂でもメインストリートに店を構えていた。



繁華街近くの角地に立地

江戸商人たちの知恵

人気絵師の浮世絵で店を宣伝

商品が一目でわかる店構え

“見世”で売る

小規模な常設の店舗では看板のデザインに工夫を凝らし、何を販売している店舗か一目で分かるようにしていました。店前には客の目を引くよう商品が陳列され、菓や楊枝、日々の生活に必要な商品や煙草などの嗜好品まで幅広い商品が売られていました。



901656

楊枝屋の店前と柳の描かれた看板

三代歌川豊国「東海道四谷怪談 楊枝見世おもん 小間物屋 与茂七 民谷伊右衛門」1861年

看板のデザイン

楊枝の材料である柳が、看板に描かれている。商店の看板は一目で商品がわかるよう工夫されていた。

楊枝屋店前の右端の棚には、歯磨き用の房楊枝など各種楊枝が客の目を引くように見やすく並べられている。

房楊枝

商品のディスプレイ
意匠を凝らした包み紙と共に陳列されている。



「柳屋おもん 岩井桑三郎」(002-1589)
早稲田大学演劇博物館蔵

「布もめん類」も扱う

看板
「現金かけねなし」



900181

幅広い客層
武士 町人 僧侶を相手に接客する店員(手代)

正札附 = 値札付
誰でも同じ値段で購入できます

裏返すと…
誰でも同じ値段で買えないことが多かった



連なる屋印の暖簾
岩+□=岩城升屋

屋号・屋印の暖簾が連なる店頭が描かれ、宣伝のため製作された浮世絵であろうことを示す

『攝津名所圖會』に描かれた大坂の店②

高麗橋一丁目は呉服・縫物屋街。同じ並びに岩城升屋も軒を連ねていた。

高麗橋通の呉服店
三井越後屋
『攝津名所圖會』4 NDL蔵



麴町の賑わう店前 呉服屋岩城升屋

初代歌川広重「岩城升屋店先之図」1850年頃

呉服屋岩城升屋の繁盛と賑わう通りが描かれている。升屋が宣伝のため版元佐野屋喜兵衛に製作を依頼した可能性が高い。升屋は元は大阪の米商で、3代目が大阪で呉服屋を始め、京都の支店に続き、1690年江戸に出店した。

店舗を持たない商人の世界

仮設店舗・振売り

江戸では常設の店舗を構える商人よりも、路上の仮設店舗で商ったり、天秤棒を担いで商品を売り歩く商人が、圧倒的に多くいました。その実態は判然としないが、歌舞伎役者を行商人に見立てて描いた浮世絵などからその一端を覗いてみます。



901664

冷や水売り

歌川国芳
「絵兄弟願乃顔面 水売り」
19世紀

江戸では夏になると、冷や水売りが「冷やっこい」の呼び声と共に、砂糖や白玉を入れた甘い水を売った。一杯4文、8文、12文と甘味によって異なったという。



901575

冷や水売り

歌川国貞(三代豊国)
「俳優見立夏商人 冷や水売り」
19世紀前半

なまぬるい
役者のきもをひやさせむ
うつ巻瀧の氷水売

天秤棒を担ぐ商人



901585

冷や水売り

三代歌川豊国
「夜商内六夏撰 水売り」
19世紀半ば

染付の陶器で冷や水を商っている。口当たりが冷たい金属(真鍮・錫)の器で飲ませる店もあった。役者は八代目市川団十郎。「鯉の滝登り」は、市川家伝統の模様。

夜商内六夏撰

夜商内六夏撰(見立て役者絵揃物)より「六歌仙」に模して、6種の夏の夜商い(水売り、麦湯売り、水菓子売り、虫売り、植木売り、提灯売り)を役者絵で描いたシリーズ。(うち当館所蔵の5点を紹介)



画像3点:『熙代勝覧』Staatliche Museen zu Berlin蔵



901586

水菓子(果物)売り

三代歌川豊国「夜商内六夏撰 水菓子売り」
19世紀半ば

夜商内六夏撰

水菓子とは果物のこと。梨・西瓜などの商品を並べた樽の前で、瓜の皮を剥く様子が描かれる。役者は、初代坂東しうか。



901584

麦湯(麦茶)売り

三代歌川豊国「夜商内六夏撰 麦湯売り」
19世紀半ば

夜商内六夏撰

縁台を出し、女性が給仕して麦湯を売るのが夏の風物詩となった。役者は、三代目岩井衆三郎。

麦湯売りいろいろ



『娘狂言三勝話』NDL蔵



『狂歌四季 人物』4 江戸東京博物館蔵

麦湯売り 1杯4文
看板に「むぎ湯 大はく入四文」(大はく=砂糖)とある。冷や水売りとはほぼ同額でライバル関係にあったことを示す資料もみられる。

様々な飲みものの販売
麦湯の店で、玉子湯、くず湯なども商っていた様子が描かれる。



901576

提灯売り

三代歌川豊国
「夜商内六夏撰 提灯売り」
19世紀半ば

夜商内六夏撰



901577

虫売り

三代歌川豊国
「夜商内六夏撰 虫売り」
19世紀半ば

夜商内六夏撰



枇杷葉湯も1杯4文 ▶

「枇杷葉湯は 毎年夏季になれば 暑氣払ひと称し茶碗壹ぱい 砂糖を入れて四文ツゝにて商ふもの也」

『世渡風俗圖會』

枇杷葉湯売り ▼

枇杷の葉などを煎じた湯は、暑氣払いに効くとされ、夏の風物詩であった。



『世渡風俗圖會』5 NDL蔵



901665

虫売り・植木売り

歌川貞虎「俳優見立夏商人 虫売り・植木売り」
19世紀前半 大判三枚続錦絵の右

虫売りは夏の風物詩で、蛭や声を楽しむ松虫・鈴虫なども売られた。虫籠も、扇形や船形など凝ったものも用いられた。
植木売りは、18世紀半ば以降、鉢植が普及し、園芸が庶民の楽しみとなる中で、見られるようになった。

画像不掲載

Photograph©Museum of Fine Arts, Boston



901667

簪売り

歌川国芳「江戸子揃商人尽 簪売り」1831年

シリーズでは魚売りが知られる。
役者は、二代目沢村源之助。



虫売り

歌川豊広「下村呉服店之図」(大判三枚続)より1800年前後

様々な虫籠が屋台を彩っている。



NDL蔵



901666

古道具売り、菜売り

歌川豊国「其蓋色三組 菜売り 古手売り」1815年
「なうり長蔵 市川團十郎」、「古手売八郎兵へ 松本幸四郎」

「古手売」は、古道具や古着を販売する商人をさしたが、この絵では古道具を売っている。菜売りなど八百屋の小売りは、江戸では店舗営業と振売りがみられた。小売りは仲買から仕入れ、仲買は問屋を通じて荷を買い、問屋は産地から荷を仲介し青物市場を構成していた。一方で江戸近郊から野菜を直接仕入れて販売する小売りもいたと考えられる。



901658



日本橋の絵巻物に描かれた菜売り

『無代勝覧』より
Staatliche Museen zu Berlin蔵

白酒売り

歌川国貞(三代豊国)「芝居絵 山川白酒売り」1868年

「山川白酒」は京都六条油小路辺の酒屋で造られた白酒が山中の白濁した川水にたとえられたという。江戸後期「山川や」という呼び声で、担い桶で売り歩く姿が冬から三月の節句の風物詩となり、文芸作品にも登場する。江戸では神田鎌倉河岸の豊島屋が有名となった。



901620



金魚売り

歌川国貞(三代豊国)「俳優見立夏商人 金魚売り」19世紀前半

金魚は、17世紀末には金魚屋で売られたという。横側から観賞できるガラス製の金魚鉢に入れ売られている。歌舞伎役者の屋号「成駒屋」を盛込んだ狂歌が添えられている。
わざをきもこまかきさでのきぬぶるい
きくなり駒の金魚商人 梅屋



901574

金魚売り

三代歌川豊国「流行浴衣当世揃 金魚売」19世紀半ば

商いの道具

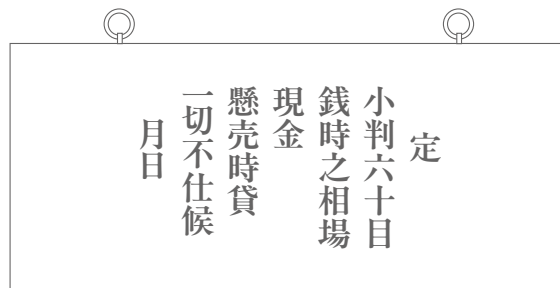


961086

商家の看板「現金即時払いをお願いします」

1809年

商家の店先に掲げられた看板。
江戸時代、金・銀・銭貨が使われたが、看板には「金貨と銀貨の交換比率は(幕府が定めていた)【小判1枚 <金1両> = 銀60目(匁)】で、銭貨はその時の相場で計算する」と書かれている。
後日まとめて支払いをする掛け売りや時貸しでの売買は一切承らないことも明記されている。



963197

商家の看板

「現金即時払いをお願いします」

江戸時代

看板に「現金」ではなく「現銀」と書かれている。
看板の「現銀かけ売り仕らず候」とは、掛け売り(後払い)ではなく、購入時にその場で現銀-キャッシュで支払いを受け、定価で安く売るという宣伝文句である。
主に西日本では銀建ての取引が主流であった。

商家の看板と「現金かけねなし」の新商法

「現金かけねなし」とは、現金-キャッシュで支払いを受け、定価で安く売るとい商法。それまで呉服などは掛け売りが主流で適正価格が分かりづらかったが、現金掛け値なしの新商法により値段交渉することなく定価で購入できるようになり、客層が広がったとされる。

現銀かけねなしと現金かけねなし

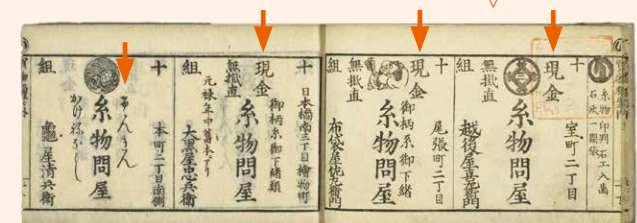
各都市の商店を一覧にして紹介する印刷物において、上方と江戸で宣伝文句「現金かけねなし」に表現の違いがみられる。



『大阪商工銘家集(名所旧跡浪華 諸匠諸商買物獨案内)』一橋大学附属図書館蔵

浪華(大坂)など上方では
現銀かけねなし

江戸では
現金かけねなし



『江戸買物独案内』上 NDL蔵

このような記載はあるが、一方で、実際にどのように支払うのか(金貨・銀貨・手形)、選択肢が複数存在したのが江戸時代の特徴であった。



956004



側面



上部の取り外し

銭箱

江戸時代

銭などを入れやすいよう上部に漏斗がついている。漏斗は取り外し可能。



954045

千両箱

江戸時代

金銀貨などを入れて保管していた。厚手の木材でつくられ、上蓋は蝶番で開閉する。「升屋」「十二」の文字が裏に記されている。



956022

銭桶

江戸時代

銭などを入れやすいよう上部の蓋に穴が開いている。



956032



956035

銭ざる



958262

958263

銭かご



一気に金貨を数える 金枰

(一分金用・一朱金用)

両替屋などで小型の計数金銀貨を数えるのに用いられ、一分金用は80枚、一朱金用は16枚を数えることができる。
金貨の貨幣単位は4進法で、4の倍数の枠が設けられることが多かった。



針問屋 値段表の版木

江戸時代

針の種類ごとに値段が記されている。
同業者間で値段を定めていたことが分かる。



版面の反転

963514



963515



963516

酒の“通帳”をつくるための版木

顧客は「通帳」を持って店へ行き、通帳に月日・品名・金額などを記入してもらうこと(「付け」)で酒や野菜などを買った。現在のボーナス一括払いと同じように、支払いは盆暮れや秋の収穫期などにまとめて行った。江戸時代中期以後、代金後払いの約束で商品を手渡しし、盆暮れや秋の収穫期などにまとめて決済する売買の方法が盛んとなった。これを「掛け売り」「付け買い」という。

通帳と酒樽を持った小僧

日本橋越後屋の前には、通帳と酒樽を持った小僧が描かれている。



『熙代勝覧』 Staatliche Museen zu Berlin蔵



版面の反転

酒の値段の記載

並	上	極上
酒	酒	酒
八	九	十一
匁	匁	匁

食事処のチラシの版木

江戸時代

黄枯茶飯、豆腐料理などを提供する店のチラシを刷るための原版。



963520

営業免許証で同業者の日印鑑札

商工業者・日雇などの営業免許証。木札は腰から提げた。同業組合の証としても用いられた。
餌差など、幕府からの許可制で人数の統制がある場合もある。



裏

餌差

1657年

963367



裏

銅細工仲間

1854年

963368



裏

糸仲買

1866年

963371

餌差とは？

細長い竿の先に鳥もちをつけて、鷹狩用の鷹の餌となる鳥を捕獲した稼業。



『熙代勝覧』より Staatliche Museen zu Berlin蔵



963388

菓子売り

1887年



963387

菓子売り

1885年



裏



裏